

フェブキソスタット投与中に尿沈渣中にキサンチン結晶を認めたと一例

©山田 真以¹⁾、福田 峻¹⁾、辻 智美¹⁾、木村 千晶¹⁾、西村 美幸¹⁾、樋口 武史¹⁾
彦根市立病院¹⁾

【はじめに】キサンチン結晶は、腫瘍崩壊症候群(tumor lysis syndrome; TLS)発症予防として使用される尿酸生成抑制薬やキサンチンオキシダーゼ阻害薬等により生成し、閉塞性腎障害を起こす可能性があるとされている。報告例も少なく臨床的には認知度の低い成分ではあるが、早期に報告することにより腎障害発症を回避できるきわめて重要な成分である。今回我々は、尿沈渣中にてキサンチン結晶を認め、主治医への報告により腎障害発症予防へと繋がった症例を報告する。【症例】74歳、女性。他院より紹介され急性骨髄性白血病にて2021/8/26～入院中、9/1より寛解導入療法が開始された。TLS予防のためフェブキソスタットが8/31～7日間、フロセミドが9/2～定期的に投与された。

【血液検査所見】8/26 : CRE 0.77 mg/dL、K 4.2 mEq/L、BUN 13 mg/dL、UA 5.9 mg/dL、Ca 8.80 mg/dL。8/30 : IP 1.2 mg/dL。9/3 : CRE 0.52 mg/dL、K 4.7 mEq/L、BUN 26 mg/dL、UA 2.8 mg/dL、Ca 6.86 mg/dL、IP 4.2 mg/dLであり、BUN高値ではあるものの腎機能については正常と判断された。【尿沈渣所見】9/3の尿沈渣にてキサンチン結晶を疑う

褐色の板状の成分を多数認めた。主治医には、形態よりキサンチン結晶を疑い、本結晶により閉塞性腎障害を引き起こす可能性があることを報告した。結晶の溶解性を調べたところ、加温、EDTA、酢酸、塩酸には不溶であったが、水酸化カリウムには溶解したため、キサンチン結晶であることが推測できた。また、尿沈渣を外部委託検査に提出し、結石分析にてキサンチンと類似した成分であるとの報告があった。【考察】本症例では、キサンチン結晶の意義について臨床的にはあまり知られていなかった。しかし、一般検査室から本結晶の意義について報告したことで、より厳しい腎機能のモニタリングへと繋がった。今回のように尿酸生成抑制薬やキサンチンオキシダーゼ阻害薬等を投与中の患者における腎障害発症予防のためにも、尿沈渣検査にてキサンチン結晶を検出することは重要である。また、それら投与中の患者における尿沈渣検査の依頼を積極的に行ってもらうためにも、普段から臨床医との連携をしっかりと取っておくべきであると考え。連絡先 : 0749-22-6050(内線 1730)